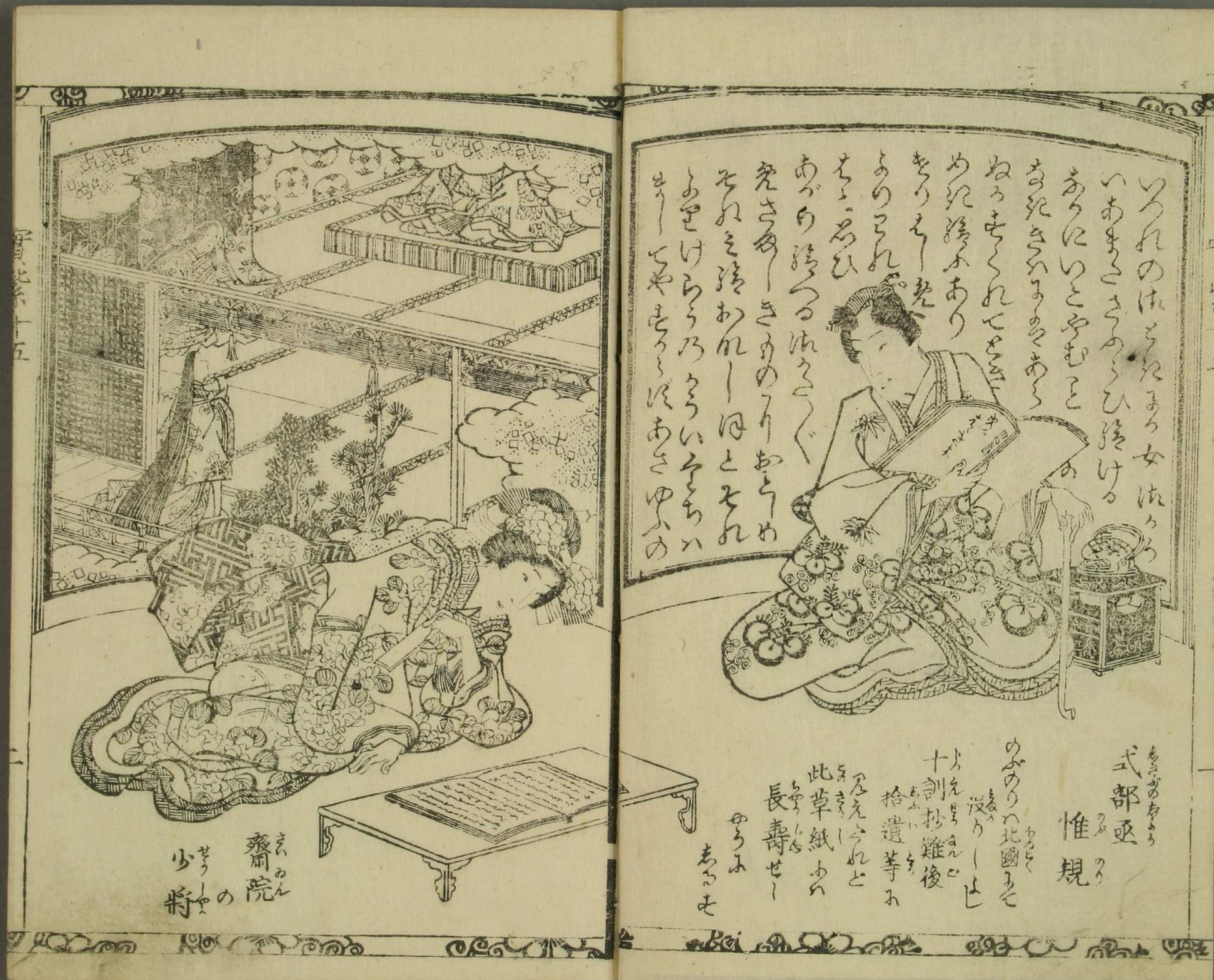
根源寮集

十五

へ遠 13
1580
15

門へ遠13
號1580
巻15

石山寺ハ参籠ニ為て源氏を作と物と計一向に心得ーハウニコウルを獣角少
思ひ昔のさと今を段々理を究め大地ハ毬の如きものと説ハ疑ハの者曾く
なし二乃山も孝子の御代ぞいもとも人信ぜず然ハ有と空言ハ又虚誕ぞ
通て物の本草造紙とて哭ぶりや笑ふて悦ぶハ道理の外に娯楽ぶるとれ
吾黨乃幸ありあるを以て名もを倡也實紫ハ偽紫の面影ハ微へのと校元
数注文ハ是ぞ其由縁ハ絡るいといとして年々ハ延しかこーが紫式部の後家
に為る話も已ハ近づにあれを是より華ハいろく薄らぬ實勝の所ハ雑蒙達の
必適意ぬと今ハ浅ぬ田舎染彼紫筆を摘出て源氏乃大意を遠ハ
ら也書ふるゆらに結構ぶれバ其俤を絵も御制熟多きをカハて十七編
のあらまり桐壺第ハ之記出さんあくあハ石山あらぬ和ハ蒲團の
形の東山を窓ハ光く京極の家ハ筆とあいれの大御時ハこのと書



式部丞
惟規

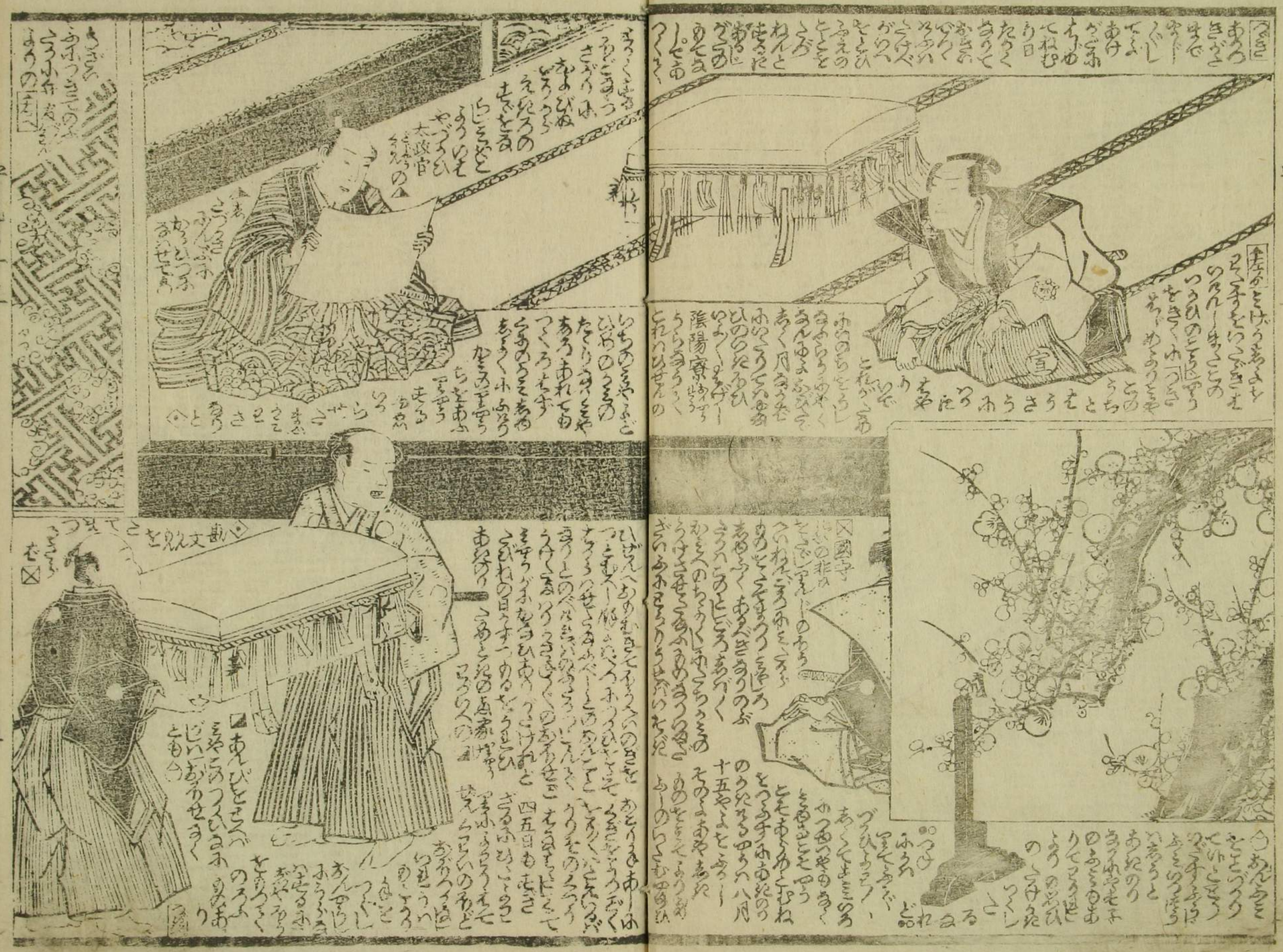
めぶのりの北國ぶそ
浅りし
十訓抄雑後
拾遺等ゐ
乃元ゑれど
此草紙ゐ
長壽せし

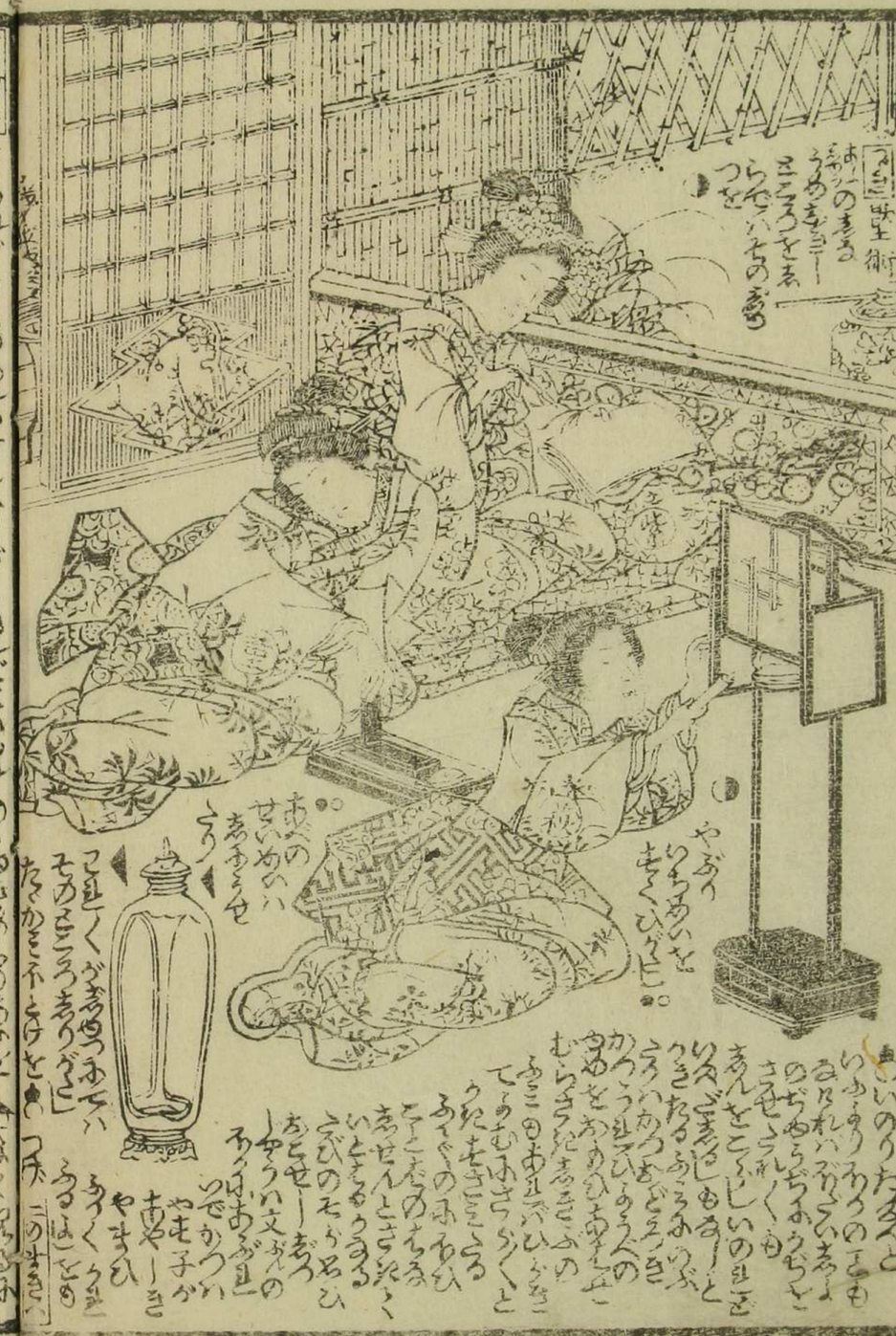
齋院の少將

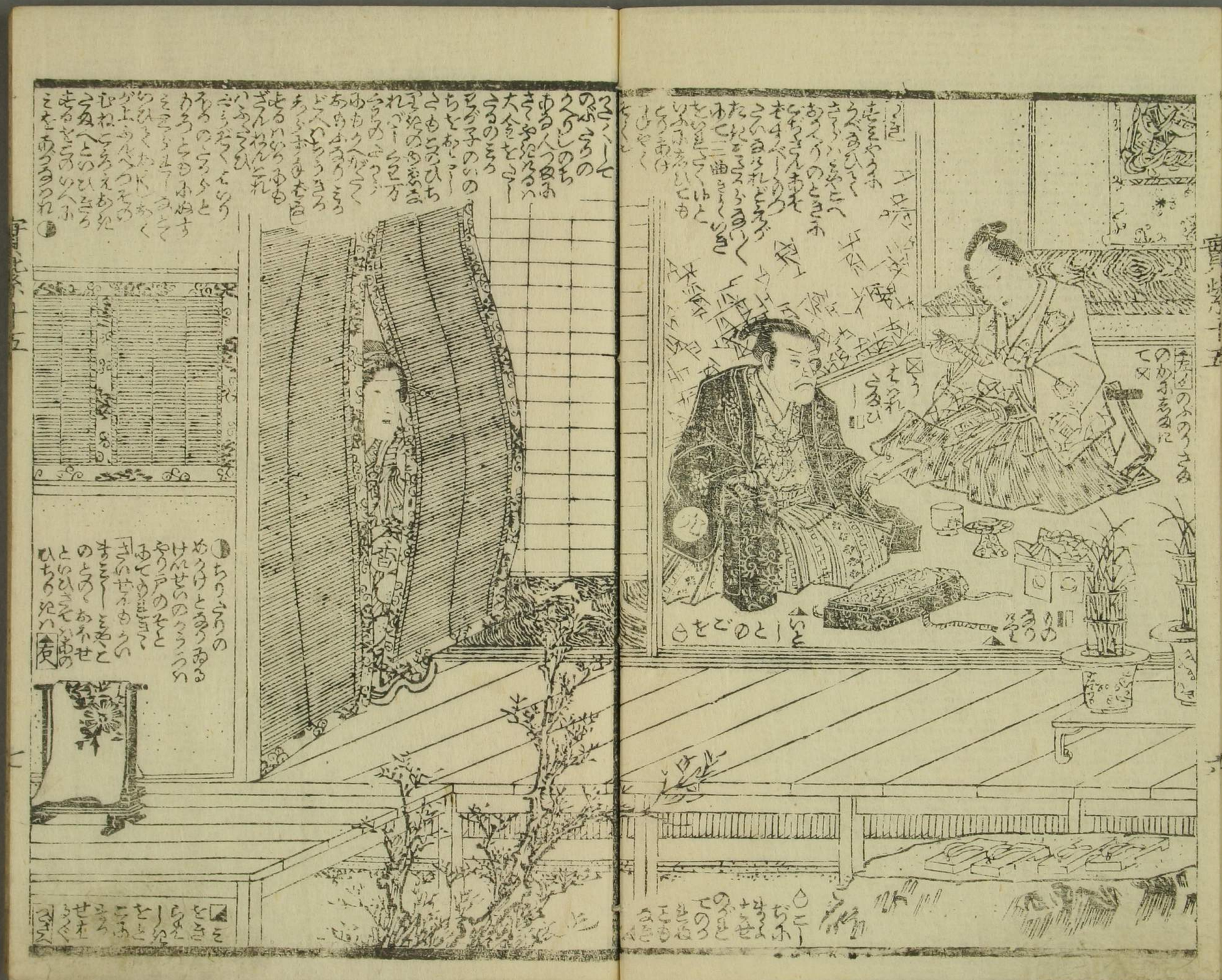
出一たるその巻の繪とゝ口画の補景とまるも猶一角の堅しと誹る
手毬つく子や不二額の姉さんゆい踊まれぬべくや

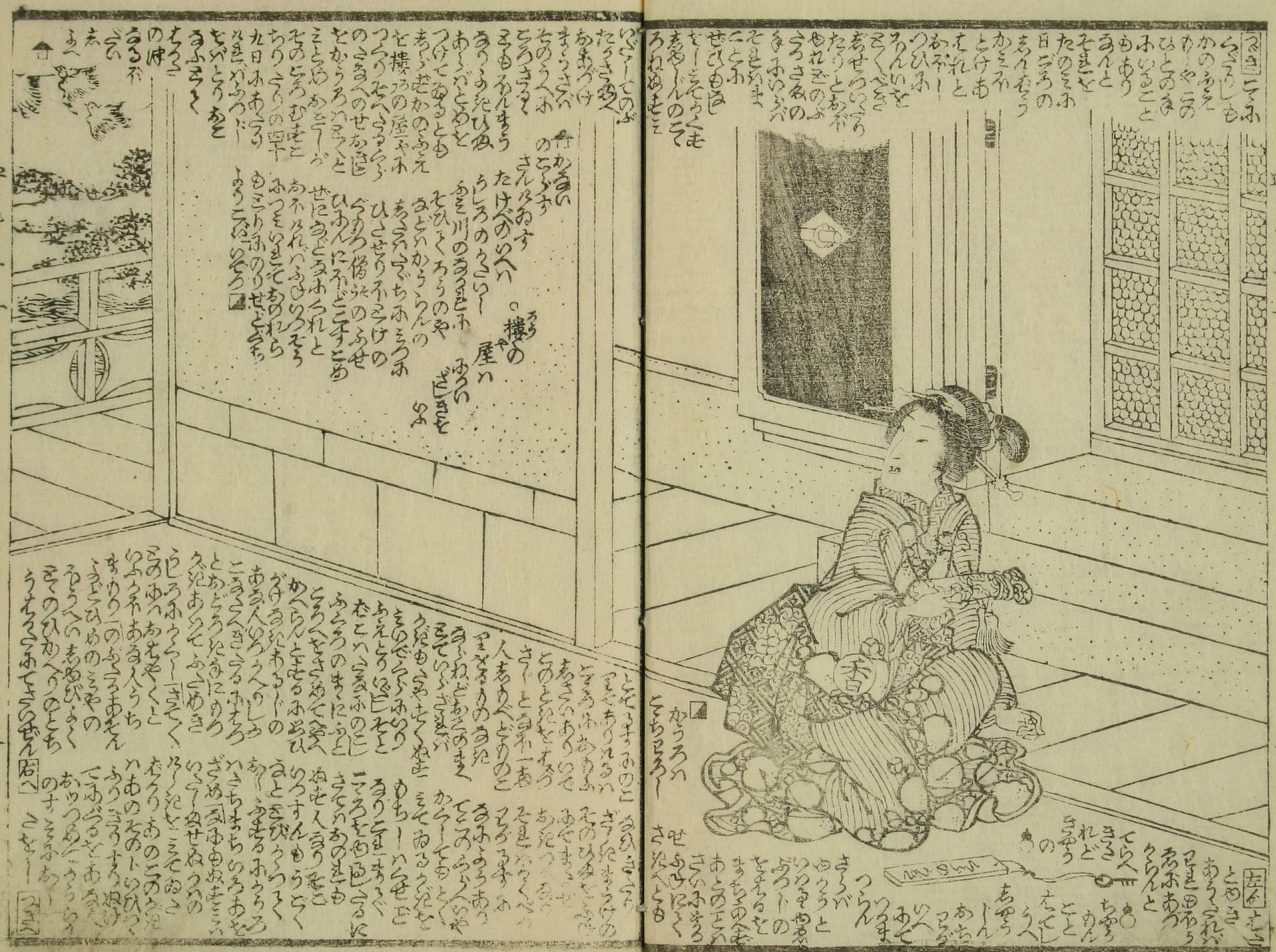
壬戌春新刊

柳亭種彦







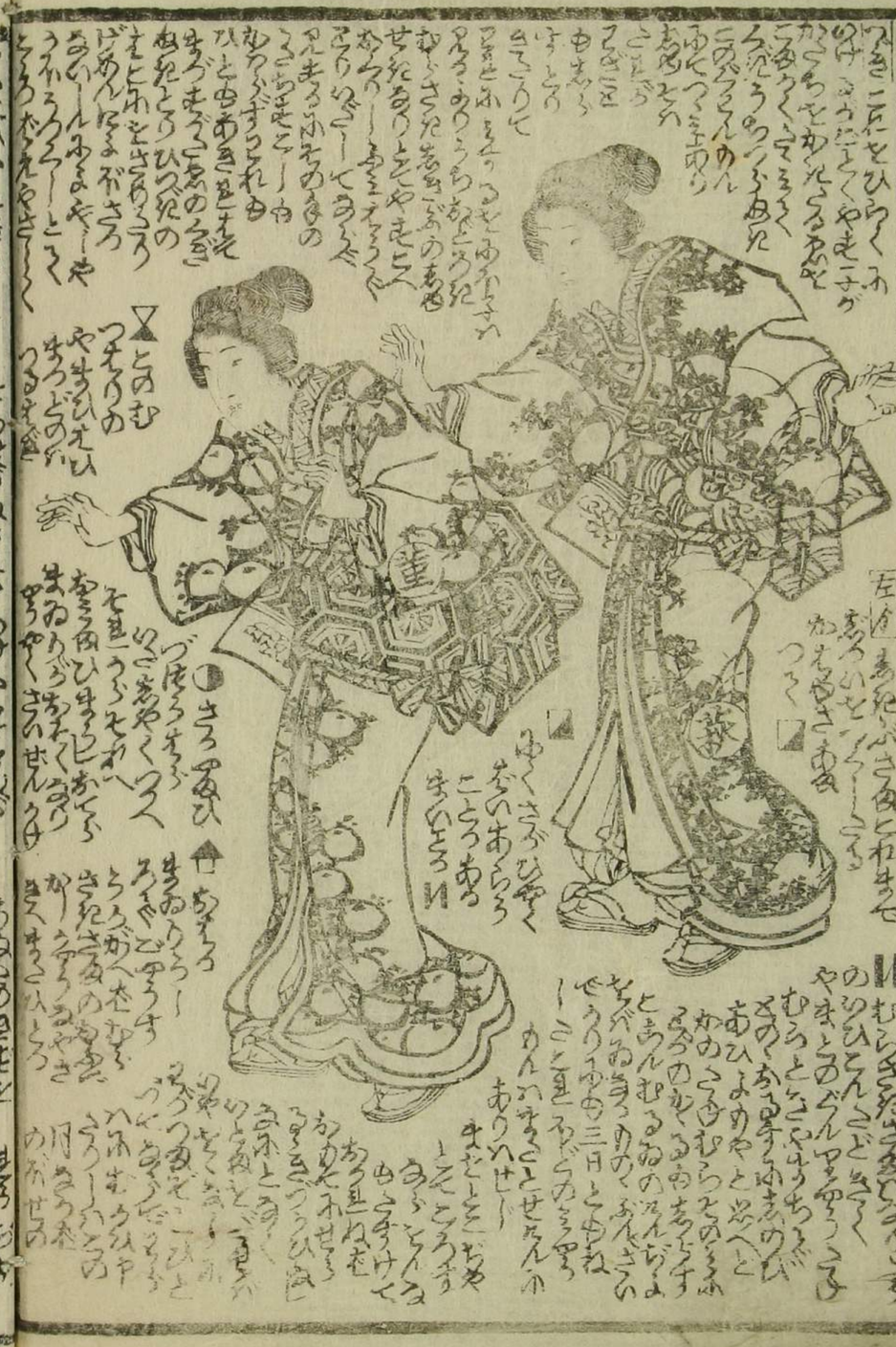


重彦作
國貞畫

三

行無常是生滅法
宣
頭

橋姫社



種彦作

國貞画